



今月のトーク/monthly talk

H-HOUSE 全景 撮影:阿野太一

防災都市づくり

写真は、このたび品川区に竣工させていただいた住宅です。この建物はRC造で、区の「都市防災不燃化促進事業」の対象地域に建てられたため、助成金を受けることができました。

「都市防災不燃化促進事業」とは、計画道路である補助46号線を災害時の安全な避難路としていくために、その沿道地区で耐火建築物を建てる建築主に対して、建築費の一部を助成する事業です。最近、地震など自然災害のニュースが、国内外を問わず毎日のように入ってきます。東京に阪神・淡路大震災と同規模の直下地震が発生した場合、火災による被害は、木造住宅が密集した地域を中心に、山手線に囲まれた面積の約1.5倍、9,600haにおよぶと予想されています。(東京における直下地震の被害想定:平成9年)

そのため、東京都では防災都市づくりを目指して、さまざまな整備事業を行っています。助成制度を設けることで、耐火構造への建替え需要の促進を行えるよう、ほとんどの制度は期限が設けられています。

今回の助成事業のせいでしょうか。この建物の近隣も、建築ラッシュ。木造住宅が立ち並ぶ、私道が入り組んだ地域ですが、ごらんのように、耐火建築のデザイン性のある建物がいくつか増えています。バブル期のクラッシュアンドビルドを反省し、最近ではリノベーション、リフォームの需要が高まっていますが、一方で都市の安全性を高めるためには、必要な建替えがあることを否定できません。品川区の都市開発課住環境整備担当の方にお話をうかがったところ、「3,4年前に東京都の地域危険度マップが発表されて、住民の防災意識が高まったようだ」とのことです。東京都の防災に対する備えも「自らの生命は自らが守る」という自己責任の原則に方針転換され、行政はその手助けをするという姿勢を取っています。

しかしながら、今回のお客様は、建替えではなく、新しく住宅を建てられた方です。無駄なものを排除した、耐震性のある建物をご希望になれば、その結果RC造の建物となりました。工事と環境改善の相関関係は特にありませんでしたが、このように小規模でも、数が集まれば短い期間で効果をあげることができます。大規模な改修工事や公共工事だけが街を変えるものではありません。助成制度のより積極的な展開、広報活動により、さらなる効果が望めるでしょう。

逆に規制面では、品川区では「新たな防火制度」として、地域の建築物の耐火性能を向上させるために、今年の4月1日から、対象地域で、新築や一定規模以上の増築を行う場合に構造制限が適用されるようになりました。原則として対象区域内は、準耐火建築物以上の性能の建物とし、延床面積が500㎡を超えるときには、耐火建築としなくてはなりません。より厳しい条件で一定時間以上火災に耐えられる建物を作りましょう、ということです。

ご存知の通り、都心で危険度が高い地域は、私道の入り組んだ地域です。築30年以上の建物が法律改正で既存不適格となっていたり、ミニ開発で持ち合った私道の問題をめぐり近隣関係がこじれたりすると、建物のスムーズな建替えや、道路の補修が行えないばかりか、時には地域全体が迷惑することがないとも言えません。

防災都市に変えていくには、行政の力だけでなく住む人一人ひとりの気持ちが何より大切です。頻発する各地の地震や予知情報を自分のものとして受けとめ、建物を所有する人は、自分の子供や孫に揉め事やわずらわしい作業を置き土産にして貴重な時間を奪うよりも、近隣の方にも感謝されるような知恵と工夫を、お元氣なうちから見せていただきたいものです。

H-HOUSE 新築工事

縦と横に広がりをもつ2つの空間が結合した家

細かく分割された敷地とその間に張り巡らされた細い道路、そのような敷地周辺の状況の中で、二方向に面する前面道路からなるべく建物を引いて配置し、それらの間に空地をもうけることで、周辺敷地から縁を切ることを考えました。

必要とされた居室を四層の建物で構成しています。最下階を地下に半分埋めたバスルームにして、その上を垂直方向に意識した、二層分の天井高をもったリビングルームとしました。この空間は黒を基調として、開口部も抑え、外部に対して閉鎖的にしています。

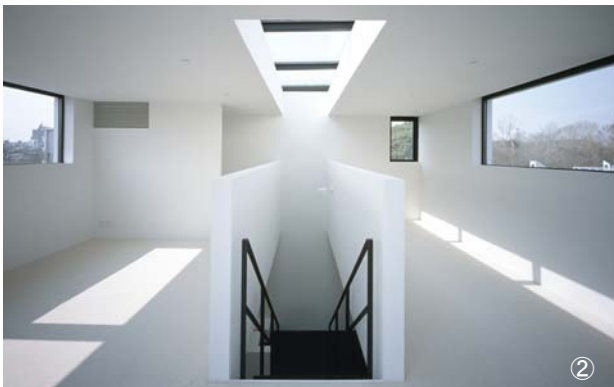
それに対して最上階は、天井高を低く抑える代わりに四周に開口部を取り、水平方向に広がりを持たせた白く明るいベットルームとしています。質の異なった空間を縦に積み重ねることで、都心の小さな住宅の中に、多様な風景を生み出すことを意図しています。

(大堀伸/ジェネラルデザイン)

＜お客様にもインタビュー＞

H-HOUSEの施主、H様は雑誌編集のお仕事をしています。建てる側からのご意見を伺いました。「家を建てることになって、建築家を決めるまでに半年くらいかかりました。何人かの建築家の方に実際に会ってお話をしてみたんですけど、長いスパンで一緒にできそうな方にはなかなかめぐり合えないんですね。大堀さんのことは雑誌で知りました。掲載されている写真がすべて自分の理想通りだったので、ほとんど興奮状態で電話したのをおぼえています。会ってお話をして即、お願いすることになりました。知人同士で繋がっていたということも決定要素のひとつになりました。

実際に家を建てる際のやりとりは施主側にしてみれば、『選択・決定』の連続です。とても短い時間で次々と決定しなくてはならない。どういうテーマで家を建てたいのか、ウェブサイトや本などで紹介されている写真のどこを、なぜ気に入ったのかなど、施主側が自分の好みを自覚することで建築家とより深いコンセンサスが取れるんだと思います。建築家とのやりとりは、編集者の仕事とよく似ています。まずは信頼関係を築ける建築家をじっくりと探す。それから施主側が自分のオーダーをはっきりしておくといった事前の作業がすごく重要だということを感じました」



- ①2階リビングルーム。吹き抜けの縦の空間が白と黒の対比によりダイナミックに感じられる。
- ②4階ベッドルーム。白を基調に四方に景色が広がる。林試公園の緑が美しい。
- ③3階から4階への階段。天窗から光が降り注ぐ。3階はほとんど吹き抜けだが左側にトイレがある。
- ④2階キッチン部分。正面の窓の右側が1階への階段。下りたところが玄関である。

撮影：阿野太一①②③
④のみ編集部



林試の森公園の近くで、建築ラッシュの地域でした。前面道路も狭かったのですが、トラブルも無くスムーズに現場を終えることができました。1、2階は吹き抜けになっており、また、4階は一部鉄骨造なので見晴らしの良い、開放感のある建物になっています。

内外装が全て塗装なので仕上げに苦労しましたが、設計事務所さんの御指導のもと工期通りに完成することができました。
(佐須正和主任)

所在地：東京都品川区
構造：RC造、一部鉄骨造 地上4階
用途：専用住宅
設計：大堀伸
/ジェネラルデザイン一級建築士事務所

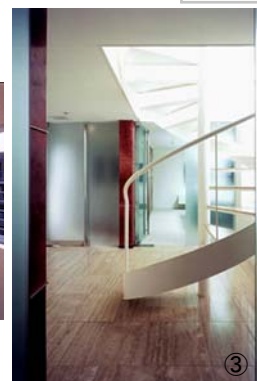
T-building 改修工事

都心のビルの上階をハイセンスなオフィスに

昨年、外壁改修工事を開始、引き続き6、7階の内装改修工事をさせていただきました。6階は大小3つの会議室、7階は社長室と会議室の構成で、いずれも床は大理石、壁は一見塗装に見えるのですが、2色の「アルガンディコ仕上げ」となっています。購入家具まで、すべて設計事務所がコーディネートし、すばらしいインテリアに仕上がっています。

(弊社施工担当)

所在地：東京都港区
構造：RC造 地上5,6階
用途：事務所
設計：野口信彦
/TPO一級建築士事務所



①7階社長室。都心の景色は圧巻。②7階会議室。壁の間接照明が落ち着いた雰囲気。③6階エントランスを臨む。螺旋階段で7階へ。④7階螺旋階段を上りきったところ。ガラスブロックの透過光で明るい室内。



大堀伸(おおほり しん) profile

1967年岐阜県生まれ
 1990武蔵野美術大学建築学科卒業
 1992武蔵野美術大学大学院修士課程修了
 1995インテンシオナリーズ共同設立
 1999ジェネラルデザイン設立

主な仕事
 S邸
 N邸
 富ヶ谷の住宅
 ギャラリーロケット
 cowbooks
 gantan

今月は、ジェネラルデザインの大堀伸さんにご登場いただきます。弊社では、この3月にH邸ほか2件の個人住宅を竣工させていただきました。

現在、神宮前のマンションに住居を含めた3室を借りている大堀さんは、自分は仕事とプライベートは切り離せないタイプとおっしゃいます。1つは寝るところ、1つは打合せ兼私物のスペース、そして事務所と結果的に職住接近になってしまったそうです。ご自身でリフォームされたそのうちの一室でお話を伺いました。

—お客様は、クリエイターが多いのですか。

大堀:そうですね。ファッション、デザイン、音楽関係の方が多いです。共通の知り合い、過去の仕事を介してのご紹介が多いですね。仕事が掲載された雑誌をごらんになられたお客さんとだいたい半々です。

—武蔵野美術大学の建築学科の出身ですね。

大堀:そうです。卒業後、友人の勤めていた設計事務所に2年勤め、その後2年はぶらぶらしていました。旅行に行ったり、公園で本読んでいたり..。

—どうやって食べていたのですか(笑)。

大堀:効率のいいバイトなんかで..。それから武蔵野美術大学時代の友人鄭秀和と遠藤治郎と3人で「インテンシオナリーズ」という設計事務所を設立し、住宅からショップのインテリアデザイン、ステージセットや照明、プロダクトデザインなどジャンルにとらわれず片っ端からやりました。3年を一つのタームと考えていたので、その後それぞれの道を歩んでいます。

鄭はそのまま「インテンシオナリーズ」を引き継いで、空間のデザインのみならず、家電などのプロダクトデザインまでその活躍ぶりはここで話したるまでもないと思います。遠藤はオランダ留学後、スリランカへわたり、今は東京とタイを行き来し、住宅からバンコクのコンサートホールのステージデザインなど幅広くユニークな仕事の仕方をしています。僕は一番地味に古典的な設計事務所をやっているのでしょうか。みんなこの近くに事務所を持っていますよ。

—H邸やT邸などを拝見すると、大堀さんは、シンプル、ミニマルな設計が多いのでしょうか。

大堀:特に意識していませんし何をもってシンプルだったりミニマルというのかよくわかりません。そのプロジェクトにおいて必要と思われること、有効と思われること、それらの優先順位がぶれないように心がけているだけです。

—住宅については、どう考えていますか。

大堀:僕はあまり最初から、「住宅」だからこうあるべき、という考えから始めたくないと考えています。毎回プロジェクトの最適解を模索し、クオリティの高い成果物をクライアントに投げ返すことだけを実践しています。それがたまたま住宅だったり、お店だったり、学校だったりということですが。

個人住宅の仕事が多いですが、店舗のインテリアデザインも割とやっています。それと地方の美容専門学校現場が今竣工直前です。一つのジャンルを専門にというよりバランスよく仕事をやりたい。事務所の業務内容的には効率悪いと思いますが、僕にはその方が精神衛生上いいんです。

—建築家を目指されたのは、いつごろですか。

大堀:祖父が大工で、毎日かんなをかけているような風景が身近にあって、ものを作る現場、建物と空間ができあがっていくプロセスが面白いと感じたのが始まりです。小学校に入る前から漠然と興味を持っていました。

設計という仕事を意識し始めたのは、高校生の頃、それでも将来自分で設計事務所を持ってなっていく具体的なビジョンなどは全然ありませんでした。周囲の状況や出来事に流されながら動いた結果、現在に至るという感じでした。

今でも様々な関係者の話を聞きながら仕事を進め、次第にプロジェクトが進むべき方向に自然にまとまってゆくという感覚を持って仕事をしている気がします。最終的に出来上がったものは、クライアント、うちのスタッフ、設計協力事務所、そして施工会社その他大勢の関係者がある期間一つの、もしくはそれぞれの、目的に向かって精一杯動いた結果であり、自分もその中の一人でしかないと。

—今、やりたいのはどんなことですか？

大堀:これまで僕の中には評価してもらえる人にだけ評価してもらえたい、気の合うクライアントと気分よく仕事がすすめられたらそれでよいというような気持ちがありました。今はもう少し幅広い、いろんな立場の人がその空間に入り、使用し、感じ、意見を持ってもらえる建物の設計をしてみたい。そのためには自分がやっている仕事を世間にプレゼンすることがもう少し必要かなと感じています。

逆に伺いたいんですが、辰さんみたいにこういうニュースレター作って配っていらっしゃるゼネコンって少ないですよね。

—ありがとうございます。建物を建てる楽しみのようなものをお伝えできればと考えています。施工会社の現場監督は大変ですから、うちの仕事を毎回きちんとご紹介しておきたい気持ちもあります。

大堀:そうですね、監督によって建物の質はかなり左右されますよね。現場がびりっと且ついい雰囲気である場合とそうでない人がいるし、お客さんに対しても話がきちんとできる方もいるけれど、そうでない場合もある。

—若い人は現場で最初は苦労するようですが、何年か経つと相当しっかりしてくる。学校で誰かに何か教えてもらわないとできない、なんて言っているようにも感じますよ。習うより慣れろですね。

大堀:僕らもそうでしたよ。ほとんど実務経験無しで友人だけで事務所を開いたときは、手探りの状態。身近な出来ることからやってみようかというスタートでした。設計実務だけでなく社会との接し方、小さいながらも会社のあり方とは、とよく3人で気合いを入れていました。

一人になってジェネラルデザインの最初の仕事は大阪の10坪程度の小さな洋服屋のインテリアデザインでした。その後は仕事も増えましたが、数億の建物の設計をいくつかやりながら、隣の机で小さな古本屋のインテリアデザインを平行してやったりしてきました。効率の良い手探りのやり方は今になってもあまり変わらず、毎回プロジェクトごとに試行錯誤しているような毎日です。そしてプロジェクトにかかる必要なエネルギーはその規模には全く関係がないと日々実感しています。

—今日はどうもありがとうございました。

「最近の木建具事情」

有限会社中原木工所
代表取締役

中原文雄氏

今日は木製建具・家具製作の(有)中原木工所さんです。世田谷の作業場兼事務所に弊社工事部長細山田と訪れました。

—ご商売を始めてどのくらいですか。

中原：私が始めて30年。親父はそれ以前からやっていたから、結構な年月です。

—そして今、息子様2人が一緒に仕事をやって後を継がれる。安泰ですね。

中原：いやー、頑張っしてほしいですけどね。先が長い仕事とも思えなくて、私自身あまり継がせたくないな、とも考えていたのですが……。

細山田：同業者は減っているのですか。

中原：減っていると思います。皆さんどこも工場を持っていましたが、社長が高齢になって、工場を売ってマンションにしたり、別のところに借りなおしたりという話はよく聞きます。

細山田：経師屋さんはどうですか。近くの方とずっと一緒に仕事をされてきているんですね。

中原：はい、近頃和室のお宅が少なくなっただしょう。昔は結構工事があったのですが、襖を収める、障子を収めるという仕事が本当に減っています。

細山田：時々、現場でも和室の納まりがわからない人も見かけますね。

—最近の工事の傾向として、どういうことがありますか。

中原：いい材料が少なくなりましたね。それに比して外国からの材料がすごく増えていて、設計の先生が次から次へと新しい材料を指定されるので、それを憶えるのが大変です。設計者の方はよく勉強されていて、例えば外で使う「イペ材」とか「アイアンウッド」とか腐れが無いようなもので扉を作ってくれ、という依頼をされることもあって困ることもあります。

—それはなぜですか。

中原：重いし、硬いし、扱いにくく、また狂いが大きいんですね。

—気候の違う国のもを持って来るのも「考えもの」ということですか。

中原：すぐに狂うことはないんですけど、長い時間をかけるとあちこち不具合が出るかもしれないですね。

—シックハウス症候群が認知され、建築基準法も改正されましたが、実際お仕事をされていてどうですか。

中原：今、ボンドにしても合板にしても法律に対応した商品になっていますのでそれを確認して使っています。昔は新築の家で、よくツンとくるいやなおいを感じるがありました。一番出てくるのが天井裏だと言



作業所は世田谷のまだ農地が残る地域にある。



扉を作成中の建具職人 武内さん。



左から武内さん、中原社長、次男絢平さん、長男智宏さん

います。ガスが溜まってよどむのですね。電気工事の人は特によくわかると言っていました。最近ほとんどなくなりましたね。

—ご自身がデザインから作成を受けるときもありますね。

中原：食べ物みたいになくなるものは良いですが、残るものですからやはり緊張します。設計の方が入る方が気が楽です。でも現場にきちんと納めたときに、一番うれしいですね。

—最近思うことは？

中原：細山田さんにはいつも伝えています、「もっと普通の仕事をしましょうよ」と(笑)。

細山田：特に納まりが天井いっばいの家が多く、金物も多様なものが使われています。

中原：必要以上に大きい扉とか作ってどうするんでしょうね。今の家は冷暖房がよく効いているから、すぐ曲がってしまうんですよ。

細山田：確かにデザインとして、きれいには見えるんですけどね。

中原：でも高さ2mもあればいいんじゃないでしょうか。

—使い勝手も悪いかもかもしれませんね。扱いが悪いと、結局直すことになりますものね。今日はどうもありがとうございました。

TOPICS/INFORMATION

「駒沢 PARK SIDE TERRACE-NORTH 地鎮祭」

建築主株式会社リブコム様の顔となる、新しい店舗ビル。私道を挟んで、SOUTH棟とNORTH棟の左右対称の2棟を建築予定です。



構造：S造+RC造
地上3階 地下1階
用途：店舗・事務所
設計：(株)セリエ計画研究所
完成予定：2005年9月30日

「中村北4マンション 地鎮祭」 3月23日 練馬区

3月22日 世田谷区

ユニホーの開発営業部の企画第2弾。西武池袋線中村橋近くの立地条件のよい敷地に建つ、賃貸マンションです。



構造：RC造 地上4階
用途：店舗・共同住宅
設計：(有)山田安司建築工房
完成予定：2005年10月31日

編集後記

・今、日本では地震があると、速報でその地域の各テレビ局の事務所内の映像が流されます。私たちは被害状況をまずその映像で判断しようとしてしまいます。しかし、建物の構造・築年数で実は違いがあるということを忘れてしまいがち。整理整頓が行き届いた事務所とそうでない事務所も被害状況にはかなり差があります。個人情報保護法が施行され、オフィスの書類管理もより厳しいものが要求されています。テレビ映像で乱雑な自分の机の周辺が全国に流される気分はどんなものでしょうか。パソコンやオフィス機器が落下しない工夫は、どの程度施されているのでしょうか。各局の放送を見比べているうちに、ついそんな思いにとらわれてしまいました。